

# 女性技術者からのひとこと



新東京ジオ・システム 鈴木 由美子

最近はすっかり内勤が多くなり、“女性技術者”などというとなにか恐縮なので、一女子社員として書かせてもらいたいと思います。

就職して5年が過ぎ、6年目になります。大学時代は農学を学んでおり、フィールドワークが主でした。そんなこともあり事務職ではなく外での仕事がしたいと漠然と思っていました。大学で学んだ農学を生かせる仕事と、公務員をいくつか受けたのですがことごとく落ちてしまいました。そんなとき地元から送られてきた企業紹介の冊子を見ていたところ、この会社がのっており、社名に土質がつくのだから土に関係する仕事なのは間違いないと興味を持ち、技術として雇っていただけることになりました。

入社して2ヶ月間は、本社で土質試験を中心に試験室で機械の使い方や試験方法を一通り教わりました。土質試験の機械やボーリングの機械など、すべてが初めてのものばかりでとにかく毎日が勉強でした。2ヶ月の研修期間はあっという間に終わってしまい、5月末からは営業所に配属になり、ボーリングの現場が中心になりました。my長靴にmyヘルメットで現場に行き、初めは何か恥ずかしく抵抗があったのを覚えています。現場では、ボーリングのポイントを決めてレベルで高さを測ったり、黒板を持ち写真を撮ったり、また、土質試験のための試料を採取したりといろいろなことを学ぶことができ、楽しく充実していました。現場の方々は何もわからない私が行ってもいやな顔ひとつせず、丁寧にいろいろと教えてくれました。

そんな中、一年目の春には結婚してしまい、自分でもまさか就職一年目の何もわからないうちにするとは思ってもなく、しっかり仕事を覚えて、独身時代を楽しんでから結婚しようと思っていたのでびっくりでしたが、女性の技術職を初めて雇っていた会社はもっとびっくりだったかもし

れません。

男性は結婚すると一人前というか+αになるけれど、仕事をする上で女性にとって結婚は+αではないのだなどこの時かなり自分の中では感じてしまい、会社に対して申し訳ない気持ちになってしまいました。女性の場合は“結婚=妊娠”がどうしても結びついてくるからだと思っています。

とにかく結婚したことで“だから女性”はいわれないようにがんばろうとの思いとは裏腹に現場の回数はだんだんと減っていききました。男性社員はみんな現場に行っているのが内心すごくうらやましく思い、自分の中ではあせりと女だからといわれたくないとの思いが交錯していました。しかし、今思うと一番女性ということにこだわっていたのは自分だった気がします。

現場に行きたいという思いばかりが強くなり、上司に談判すると「現場だけが技術の仕事ではない」の一言で毎回片づけられてしまい、ますます私っていったい何をしているのだろうの繰り返しになっていきました。そんな自問自答しながら仕事に対する達成感や充実感も得られないまま月日だけが過ぎていきました。ことわざにもあるように石の上にも三年、とにかく三年は何事もやってみなければわからないと思い、手探りながらも何となくというころ妊娠がわかりました。わたしにとっては出産したことで、今までみたいに仕事の上で男性・女性というこだわりがなくなってきました。

産休中は子供を預けてまで働かなければならないのかとすごく悩みました。これは私だけではなく、子供を持つ、働く女性の大半は悩むことだと思います。その反面、このまま家庭に入ってしまったら、私と社会との関わりがなくなってしまうのではという、漠然とした不安もありました。しかし、子供が産まれてしまうと育児に忙しく2ヶ月の産休期間はあっという間に過ぎ

てしまい、私は環境的に恵まれており、産休明けから復帰することになりました。2ヶ月の子供を残して会社に行く朝は、とてもつらくごめんねの気持ちでいっぱいになってしまいました。しかし、子供は順応性が早く、今やもう私が朝仕事に行くときなど、こっちが別れを惜んでいるのに子供は遊びに夢中で手だけ振っている状態です。子供って勝手に育っていくものだなと感心しつつ、寂しい反面ほっとしています。よく仕事の代わりはいるけれど母親の代わりはないからという人がいますが、これにはいつも納得いきません。働いているからといって、母親の代わりをしてもらっているわけではありません。働いていても子供の母親としてがんばっているのです。また、周りからこんなに小さいうちに人に預けるなんてかわいそうといわれるのが、働く母親にとっては一番つらいことだと思います。

産休明けからはまた新たな気持ちでがんばろうと思い、まずはもっと現場のことを勉強して資格を取れば現場への道も開けるだろうと思い、やっとの思いで地質調査技士の資格を取得しました。しかし、今度は母親になってしまった私にはそう甘くはなく(甘いのかな?!)、子供を残して何かあったら大変だということと、また、昼間現場に行けばどうしても帰ってきてからいろいろと仕事をしなければならなくなり残業することが多くなるということでやはり現場が遠のいてしまいました。上司と話し合いの結果、今は甘えさせていただくことになりました。

そんなわけで子供を産んでみて仕事を持つ母親の大変さが初めてわかりました。女性は仕事をしたくても、どうしても子供の都合が優先されます。私の場合、民間の保育所が会社や自宅の近くにはなく、公立の保育所も産休明けから預かってくれる所は少なく、大半は1歳から(6ヶ月からもういくつかはあるが)です。

その上途中入所は難しく、延長保育などの制度もまだまだです。4月からの入所も申込日が決められており、自宅近くの保育所はかなりの倍率(都市部に比べればいいのでしょうか)でなかなか入れません。

女性にとって結婚までは何とか仕事を続けることは可能でも、出産となると周囲の協力がなくとかなり大変になってきます。いくら育児への父親の参加が社会的にいわれていても、結局は女性の方に家事や育児の負担はどうしても大きくなります。男女雇用機会均等法や育児休暇制度等が成立され、一部では男女差別がない社会になってきているといっても、女性にとって本当に働きやすい社会になってきているのかは疑問です。

私は夫や祖父母の協力があがり、一番は会社や上司が温かく見守ってくれているおかげで今のところ子育てと仕事の両立は何とかできています。

私の仕事と育児はまだ始まったばかりで、これで良かったのかは10年、20年たってみて初めて答えがでると思います。そのとき子供の成長と一緒に、今より成長している自分がいればよかったということかなと思います。子育てが一段落してから現場に行っているいろいろ学んでも遅くはないはずですよ。

とにかく今は“継続は力”仕事を続けられることを大事に、反撃(?)の機会をひそかにねらいつつ、仕事&子育てをがんばっています。まだ就職して五年半しかたっていないわけですし、まだまだこれからです。